



2019年末から年明けにかけて高熱を伴う風邪症状の患者が多いのに、インフルエンザが流行らず不思議に思っていたところ、中国武漢で新型コロナウイルスの感染症発生が報告された。さつぽろ雪まつりの終了後新型コロナウイルスが北海道で流行し始め、そして日本も含め世界中であつという間に新型コロナウイルス感染症のパンデミックとなった。

ようやく感染の終息を迎えつつある国もあるが、今なお感染拡大が起きている国もあり、世界全体では終息の見通しは立っていない。日本をはじめ韓国と台湾と中国は新型コロナウイルス感染症による死亡者が欧米諸国に比べ少

コロナの第2波の到来への不安が消えず、感染対策への警鐘が鳴りやまない。

新型コロナウイルス感染症が日本に上陸して既に8月が経った。医療の現場は今深刻な事態を迎えている。新型コロナウイルスは指定感染症のため、感染者は全員入院かホテルなどに長期隔離され、感染症指定病棟の病床は軽症の患者で一杯になりベッドは稼働しなくなった。新型コロナウイルスで死亡させてはならないとゼロリスクを求め症例を考慮せず高度医療がなされる。その結果、医療スタッフは感染患者の治療と院内感染対策で疲労する。一方、一般患者は「病院は感染リスクが高い」と怖がり受診を躊躇する。

新型コロナウイルスで露呈した医療の機能不全

—第2波への不安—

情報広報部副部長

山科 賢児

なく、重症化しない要因に、既存のコロナウイルスとのT細胞の交差反応やBCGなどによる後天的自然免疫が関与しているのではないかと考えられている。7月14日現在、新型コロナウイルスの累計感染者が世界で1280万人を超え、死亡者は56万6000人を上回っている。

感染者の8割が無症状や軽症なので「新型コロナウイルスは単なる風邪ウイルスの一つじゃないか」と言う医療関係者もいたが、感染者数や死亡者が次々と増えるとその声はかき消されて、マスメディアの不安を煽る報道が続いている。最近スペイン風邪の時のような新型

機関は、救急センターも診療所も受診者が減り経営危機に陥る。これを医療崩壊というのであろうか、新型コロナウイルス患者だけで日本中のベッドが埋め尽くされているわけではない。高熱が出ても行きつけの医療機関の受診を断られ、保健所ではPCR検査を断られる時期が続いた。また新型コロナウイルスが恐ろしくて3カ月も外出を控えた結果、高齢者は足腰が弱り気持ちも沈み通院できなくなった。家族は入院患者への面会や看取りに立ち会えず、患者は孤独で病室は病気の回復の場となっていない。これが本来の医療や介護の姿と誰も考えていないだろうが、解決しなければ医療

現場の悲惨な状況は続く。5月の緊急事態宣言解除以降全国のコロナ感染者数は少なくなっていたが6月下旬から再び増え、7月からは東京都の感染者は4月の緊急事態宣言発表時の感染者数を超える200例を上回る日が続き、再び緊急事態宣言が必要との声が聞こえる。しかし今は検査体制も充実し感染状況も局所的かつ感染者が軽症化して4月の感染状況とは異なり、新型コロナウイルス対策と「経済を死なせない」対策の両者のバランスを取るほうが実際的である。東京都の感染状況を例にとると、ここに来てPCR検査数は飛躍的に伸び、7月の検査数は7月と同様の感染者数を出した4月に比べ約7倍となっているのに対し、陽性率は30%から5%に低下した。感染者のほとんどが軽症または無症状者であり、感染拡大のひつ迫の程度を表す重症者数や死亡者数も減り続けて7月の死亡者はゼロが続いていた。新型コロナウイルスは病原性を変え、人間社会で風邪ウイルスとして生き延びようと作戦を変更したのかもしれない。それならば新型コロナウイルスを指定感染症から外すなどの医療現場と世の中の負担や不安を取り除く対応も考えるべきだろう。

新型コロナウイルスの感染が始まった頃は、未知のウイルスへの不安と恐怖で人々の思考力は停止し氾濫する情報に翻弄された。感染対策としての出口の見えない自粛生活と経済活動の規制は、社会に無力感と経済危機の後遺症を残した。新型コロナウイルスは本当に危険で厄介な存在なのだろうか。季節性コロナウイルスの流行が毎年あるように、新型コロナウイルスが弱毒化して「普通の風邪ウイルス」となる時がやがてやってくる。ワクチンや治療法がないからと言って感染に脅え忌避する人間たちの姿を、新型コロナウイルスはどう見ているのだろうか。